

親の養育態度が大学生の授業規範意識に及ぼす影響について<sup>1)2)</sup>

## The effects of parents' nurturance on senses to class rules of students

水野邦夫  
Midzuno Kunio

教育界では今、「学級崩壊」、「小一問題」など、初等・中等教育機関における授業不成立が問題となっているが、高等教育機関における「授業崩壊」も深刻な問題として大学関係者を中心に指摘されている。大学における授業崩壊に関する指摘は、「学力低下」と「授業規範意識の低下」に大別できるであろう。大学生の学力低下は、岡部・戸瀬・西村（1999）を筆頭に、小学生レベルの算数の問題が解けない理科系・経済学部系の大学生の増加や高校レベルの補習授業の開講などが憂うべき実態として大きく取り上げられている。学力低下の原因としては、文部省（当時）の提唱した「ゆとり教育」や、大学入試科目の簡略化、教育の結果平等主義などさまざまなものが挙げられているが、少なくとも学習内容や学習時間が縮小傾向にある（ごく単純に言えば、あまり勉強しなくてもよくなった）ことが影響していることは、まず間違いのないところであろう。一方、授業規範意識の低下についてはすでに慢性化しつつある感があり、前者ほどセンセーショナルに取り上げられることは少なくなったようであるが、数多くの指摘がなされている。たとえば中岡（1999）は自己の経験をもとに、学生の授業中の私語、携帯電話の着信音による授業妨害、などの実態を紹介しており、授業中の規範意識の低下について、知的好奇心の明らかな欠如や現代人のマナーに対する悪質さが背景に存在しているのではないかと考察している。また川成（2000）も、授業中の私語、携帯電話の着信音などの実態を紹介し、これらの原因として、学生の「レジャーランド気分」や大学側の「学生はお客様だから大切に扱わなければならない（p.175）」というような姿勢、などを挙げている。

1) 本研究のデータ収集、管理等については情報社会学科第3期生の石井圭祐君の協力を得た。ここに謝意を表します。

2) 本研究は、日本心理学会第65回大会（開催校：筑波大学）においてパネル発表された。

ちなみに、このような現象はわが国に限ったことではなく、たとえばアメリカにおいても事情はかなり似ているようである。Sacks (1996, 後藤訳, 2000) はアメリカのあるコミュニティーカレッジでの教員体験をもとに学生の授業態度について紹介しているが、わが国と同様、授業中の学生たちの凶々しくかつ退屈そうな態度、無断欠席、途中入退室、居眠り、私語、携帯電話・ポケベルの着信音による授業妨害、などが頻繁にみられたという。そして彼は、このような授業崩壊的状况の原因を、主に大衆消費主義とポストモダニズムに帰している。すなわち、前者は、受講生は教育を金で買っているのであり、そうである以上は、彼らのニーズ（すなわち、授業の質よりもエンターテインメント性があること）を満たさなければ退屈以外の何物でもないという発想であり、また、学業に対して自らが努力や苦勞をして知識を吸収しなければならないという発想の欠如である。そして後者は、権威的存在に対する一律的な批判と無規範性の容認（いわゆる「何でもあり」）ということになるであろう。このことは、表現や過程に若干の差はあるものの、わが国においてもかなり符合するものであるといえよう。

ところで、このような授業規範意識の低下に対し、心理学的な観点から検討しようとする試みが、最近少しずつではあるが現れはじめている。まず岩淵・小牧 (1996) は、学生の授業規範意識をアンケート調査により検討し、授業規範に対する違反が、「明らかな反規範行為」、「許容的反規範行為」、「非顕在的反規範行為」という3つの観点から捉えられることを明らかにしており、小牧・岩淵 (1997) は、学生は居眠りや内職（授業中に他の科目の宿題等をする）は反規範的行為にあたらないと考えていることを報告している。また水野 (1998 a) は、大学生ならびに社会人へのアンケート調査をもとに、授業規範違反が「迷惑行為」、「非迷惑行為」、「背信的行為」の3つの観点で捉えられると指摘している。さらに、授業規範違反を許容する要因について、水野 (1998 b, 1999) は一連の研究を行っており、公的自己意識の低さが規範違反的行動に影響しないこと、日常生活における充実感の低さ、若年層特有の価値観などが規範違反への許容に影響していることな

どを見出している。

一方、小・中学校を中心とした場合ではあるが、学級崩壊などの授業規範違反の原因として「親のしつけ」が最近になって多く指摘されるようになってきた。尤も大学生の場合、児童・生徒と学生とでは、精神的な成熟度にも相当な違いが認められるであろうし、また大学生は精神的には親からかなり独立していることなどから、親のしつけが授業規範違反の主要因となるとは考えにくいであろう。しかしながら水野（2000）は、親の子ども（学生）への拒否的な接し方が授業規範違反に対する許容度に影響することを見出している。このことは、大学における授業崩壊にも親の養育態度が強く影響していることを意味しているといえよう。そこで本研究では、水野（2000）をさらに検討し、大学生の授業規範違反に対する許容度（すなわち、授業中のルール違反に対する甘さ）に親のどのような養育態度が影響しているのかを調べることを目的とした。

## 方 法

**被調査者** 平成11（1999）年と平成12（2000）年の2度にわたり、短期大学1回生計183名（男子101名、女子82名）に対して質問紙調査を行った。

**質問紙** 調査にあたり、質問紙を作成した。1度目と2度目の調査では質問項目や回答方法が異なっているところがいくつかあるが、両者に共通している質問項目として、1）東京都生活文化局（1982）作成の親の養育態度尺度項目（父母各4項目、計8項目）、2）神足（1996, 1997, 1998）および堀内（1996, 1997, 1998）などを参考に収集した若年層で流行している行動に対する抵抗感を尋ねる項目（計8項目）、3）水野（1998 a）の授業中に相応しくない行動リストの各行動に対する許容度を尋ねる項目（計30項目）があった。

**手続きおよび実施時期** いずれの調査も、授業時間の一部を利用し、受講生に上記質問紙を配布して回答を求めた。回答時間は10分から15分程度であった。また、調査はいずれも後期第1週目の授業時に行った。

## 結 果

分析にあたり、記入洩れなどのあるデータを除外したため、最終的に172名（男子96名、女子76名）のデータを分析対象とした。

**変数の作成** 上記3種の各尺度・質問項目群について因子分析（主成分解、ヴァリマックス回転）を行った。いずれについても、固有値の推移や解釈可能性などを考慮して因子数を決定した。その結果、父親の養育態度尺度は2因子（受容－拒否、干渉－放任と解釈）、母親の養育態度尺度は2因子（受容－拒否、干渉－放任と解釈）、若年層で流行している行動に対する抵抗感を尋ねる項目は1因子、授業中に相応しくない行動リストの各行動に対する許容度（以後、授業規範違反への許容度）を尋ねる項目は2因子（非迷惑行動、迷惑行動と解釈）をそれぞれ得た。各尺度・質問項目群の因子負荷量行列を表1から表3に示す。なお以後の分析では、各因子の因子得点を変数とした。

**表1 親の養育態度尺度の因子パターン**

〔父親の養育態度尺度項目〕	I	II	$h^2$
お父さんはあなたの気持ちを分かろうとしている	.900	-.082	.815
お父さんはあなたに対して暖かい	.883	-.149	.802
お父さんは何かにつけてあなたの行動に口をはさむ	.002	.883	.779
お父さんは何かにつけて自分の考えを押しつけようとする	-.249	.807	.712
寄 与	1.650	1.459	
〔母親の養育態度尺度項目〕	I	II	$h^2$
お母さんはあなたに対して暖かい	.932	-.012	.869
お母さんはあなたの気持ちを分かろうとする	.884	-.253	.845
お母さんは何かにつけてあなたの行動に口をはさむ	-.008	.900	.811
お母さんは何かにつけて自分の考えを押しつけようとする	-.246	.840	.767
寄 与	1.711	1.581	

表2 若年層で流行している行動に対する抵抗感項目の因子パターン

	I	$h^2$
茶色以外の色に髪の毛を染める	.756	.571
ズボンを少しずり下げてはく	.732	.535
茶髪（ちゃぱつ）にする	.704	.495
「超××」などのことばを使う	.696	.485
耳以外のところにピアスをする	.674	.454
電車の中で携帯電話で話をする	.666	.444
地ベタにすわって休憩する（いわゆるジベタリアン）	.649	.422
人前でキスをする（いわゆる路チュー）	.575	.330
寄 与	3.737	

表3 授業中ふさわしくない行動リストの因子パターン

	I	II	$h^2$
うとうとする	.792	.076	.633
ぼんやりして授業を聞いていない	.767	.063	.593
机に顔をうつぶせて寝る	.737	.173	.573
予習をしてこない	.699	.144	.510
授業をする先生の名前を知らない	.693	.086	.488
他の科目の宿題などをする	.689	.316	.575
ノートをとらない	.646	.243	.477
宿題をやってこない	.632	.378	.543
授業に関係のないものを机上に出す	.615	.298	.467
紙切れに書いたメモのやりとり	.571	.190	.362
正当な理由もなく授業を休む・遅刻	.564	.326	.425
マンガやほかの本などを読む	.557	.521	.582
教科書を買わない	.541	.426	.475
勝手に教室から出ていく	.540	.455	.498
教科書を持ってこない	.506	.503	.510
たてひざをついて授業を聞く	.480	.317	.331
遅刻をして教壇側の入口から入る	.443	.327	.303
決められた座席に座らない	.437	.336	.304
携帯の電源を切っておかない	.391	.341	.269
ホッチキスで綴じずに提出	.309	.185	.130
携帯電話に出て話をする	.017	.802	.644
教室内をうろうろする	.017	.767	.588
ゲームをする	.391	.667	.598
黒板に背を向けて後ろの人と話す	.293	.663	.526
大声でさわぐ・笑う	.098	.663	.449
他人に出席を頼んで授業をサボる	.282	.649	.501
ジュースやお菓子を飲み食い	.278	.645	.493
ウォークマンなどで音楽を聴く	.464	.624	.605
出席をとった後教室を抜け出る	.429	.578	.518
まわりの人と私語をする	.398	.510	.419
寄 与	8.034	6.371	

**規範意識と親の養育態度・性差について** 次に、授業規範違反への許容度が親の養育態度によってどのように異なるかについて検討を行った。なお、水野（2000）では授業規範違反への許容度に及ぼす親の養育態度の影響に男女差がみられていることから、性差の要因も併せて検討することとした。さらに水野（1999）は、若年層の価値観への抵抗感が、授業規範違反への許容度には影響するが親の養育態度との関連が低いことを見出していることから、この要因も考慮に入れて以後の分析を行った。

ここで、親の養育態度については、Symonds（1939）が「受容－拒否」、「干渉－放任（または支配－服従）」の2軸をもとに「甘やかし（受容・放任）型」・「溺愛（受容・干渉）型」・「独裁（拒否・干渉）型」・「無視（拒否・放任）型」の4類型を見出していることから、本研究でもこの分類に倣い、父親・母親それぞれについて、各養育態度因子得点の平均値（0点）をもとに被調査者を4つのうちのいずれかに分類した。ちなみに、父親の養育態度については、甘やかし型47名（男子17名、女子30名）、溺愛型46名（男子27名、女子19名）、独裁型47名（男子30名、女子17名）、無視型32名（男子22名、女子10名）で、母親の養育態度については、甘やかし型43名（男子21名、女子22名）、溺愛型37名（男子18名、女子19名）、独裁型43名（男子19名、女子24名）、無視型49名（男子38名、女子11名）であった。

そこで、授業規範違反的な各行動（非迷惑行動、迷惑行動）に対する許容度を従属変数として、若年層の価値観への抵抗感を共変量とした2（性別）×4（養育態度）の共分散分析を、養育態度の父母別に行った。その結果、父親の養育態度については、非迷惑行動は若年層の価値観への抵抗感の主効果のみが有意で（ $F(1, 163) = 4.06, p < .05$ ）、迷惑行動は性別、若年層の価値観への抵抗感が有意であった（各、 $F(1, 163) = 4.30, p < .05$ ； $F(1, 163) = 9.14, p < .01$ ）が、養育態度の要因や交互作用はいずれも有意ではなかった。一方、母親の養育態度については、非迷惑は同じく若年層の価値観への抵抗感の主効果のみが有意であった（ $F(1, 163) = 3.91, p < .05$ ）が、迷惑行動は性別、養育態度、若年層の価値観への抵抗感の主効果に有意な差もし

くは有意な差の傾向がみられた(各、 $F(1, 163) = 2.95, p < .10$ ;  $F(3, 163) = 3.02, p < .05$ ;  $F(1, 163) = 8.63, p < .01$ ) ほか、性別×養育態度の交互作用に有意な差の傾向がみられた( $F(3, 163) = 2.27, p < .10$ )。これについてさらに下位検定を行ったところ、男子では「無視型」と「溺愛型」の間に有意な差がみられ、また「無視型」では男子の方が女子よりも迷惑行動への許容度が高いという結果が得られた。各養育態度における平均許容度得点を男女別に算出したものを図1に示す。

なお、共分散分析では共変量と独立変数の交互作用を調べることはできないので、迷惑行動への許容度を従属変数、母親の養育態度を独立変数、若年層の価値観への抵抗感を共変量とした共分散分析を男女別に行った。その結果、女子においてのみ若年層の価値観への抵抗感の主効果が有意であった。

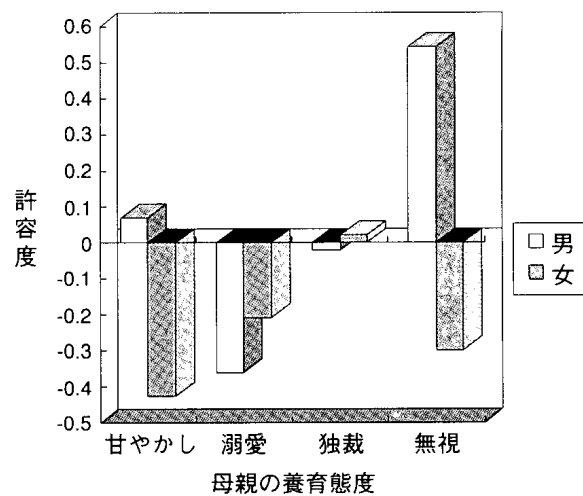


図1 迷惑行動への許容度と母親の養育態度

## 考 察

分析の結果、まず授業中の反規範的行動のうち、とくに迷惑行動については、男子では母親の養育態度が「無視型」の場合に最もその許容度が高く、最も許容度が低かった「溺愛型」との間に有意な差がみられた。無視型と溺愛型は、親の養育態度を構成する2次元(受容-拒否、干渉-放任)の双方について、その方向性が逆(すなわち、無視型:拒否・放任、溺愛型:受容・干渉)であり、その意味では最も対極にある養育態度であるといえよう。片山・戸田(1994)は、無視型を「子どもの行動や考えに無関心で思いやがないと、子に思われているタイプ(p.363)」、溺愛型を「子どもの気持ちを汲み大切にしようとするが、そのためにあれこれと口やかましくなるタ

イプ (p.363)」としているが、無視型の方が母親の子どもに対する関与が少なく、母親との精神的なつながりが希薄であると考えられる。このことが授業中の迷惑な反規範的行動に何らかの影響を及ぼしていると考えられる。

そもそも発達心理学研究において乳児期における母子関係の重要性は、多くの研究者によって、さまざまな観点から指摘されている。たとえば、Harlow (1958) はアカゲザルの子どもを用いた研究から幼少期の母子関係の重要性を見出しており、また Bowlby (1969, 黒田・大羽・岡田訳, 1976) は幼少期の母子間の愛着形成について論じ、Erikson (1959, 小此木訳編, 1973) は乳児期の発達課題として母子間の基本的信頼関係の確立を挙げている。いずれの研究・学説も研究方法や表現などは異なるが、幼少期において母子間の精神的なつながりを欠くことによって、その後の性格形成や情緒発達、ひいては他者や社会に対する態度に影響を及ぼすことを示唆している点では共通しているといえよう。今回の結果はそのような考えを彷彿させるところがあり、無視型の場合、母子間の精神的なつながりが健全な形で築かれなかったことが、他者に迷惑な行為を許容する態度を形成する原因となっていると考えられる。しかしながら、調査対象の幼少期の母子関係については審らかでないので、そのように推測するのはあまりにも性急というべきであろう。この点については、今後さらに検討する必要がある。

一方、女子は親の養育態度の影響を受けておらず、むしろ同世代の人々の価値観の影響を受けているという結果になっている。まず親の養育態度の影響を受けていない点については、女子の場合、親だけでなく社会からも規範を遵守することを性役割として期待されやすいことが考えられる。たとえばわが国では、いまだに「女の子なのだから、(男の子とは違って)はしたないことをしてはいけない」というような価値観が社会に根強く残っているようである。そのような環境下で社会化されれば、親の養育態度にかかわらず反規範意識に対する許容度が低くなりやすいことは十分に考えられるであろう。また、本研究でも性別の主効果が有意であり、女子の方が許容度が低くなっているが、これもそのような社会化の結果であると考えられよう。しか



しその一方で、女子は同世代の価値観の影響を受けやすいという結果になっており、彼女らは、同世代の周りの人々が反規範的行為に対して許容度の高い考えを持っていると、それに影響されやすくなる可能性があると考えられる。親よりも仲間の影響を受けやすいという点では、女子の方が精神的な成熟性が高いといえるかもしれない。しかしながら、周りに流されやすいという点では、女子の方が自立性が高いということはできないであろう。

最後に、今回は親の養育態度と若年層の価値観を中心に検討してきたが、反規範意識への許容度を高める原因としてはほかにもさまざまなものが挙げられるであろう。とくに、教員側の要因（授業づくりのワンパターン化、授業規律の遵守指導能力、など）に対する指摘は近年増え始めている。大学生の気質が急激に変化する現代、教員側の対応にも多様性が求められつつある。これからは、教員に対する学生の意識が許容度にどのように影響しているかについても検討する必要があるだろう。

### 引用文献

ボールビー J. 黒田実郎・大羽 葵・岡田洋子（訳）1976 母子関係の理論  
1 愛着行動 岩崎学術出版

(Bowlby, J. 1969 *Attachment and loss*, Vol. : Attachment. Basic Books.)

エリクソン E. H. 小此木啓吾（訳編）1973 自我同一性—アイデンティティとライフ・サイクル 誠信書房

(Erikson, E. H. 1959 *Identity and the life cycle*(*Psychological Issues Monograph*, Vol. 1, No. 1.). International Universities Press.)

Harlow, H. F. 1958 The nature of love. *American Psychologist*, **13**, 673—684.

堀内克明 1996 若者用語の解説 自由国民社（編） 現代用語の基礎知識  
1996 自由国民社 Pp. 1033—1036.

堀内克明 1997 若者用語の解説 自由国民社（編） 現代用語の基礎知識  
1997 自由国民社 Pp. 822—825.

堀内克明 1998 若者用語の解説 自由国民社（編） 現代用語の基礎知識

- 1998 自由国民社 Pp.1184-1187.
- 岩淵千明・小牧一裕 1996 学生の授業に対する規範意識についての研究  
日本グループ・ダイナミックス学会第44回大会発表論文集, 174-175.
- 片山美由紀・戸田弘二 1994 サイモンズの養育態度尺度 堀 洋通・山本  
真理子・松井 豊 (編) 1994 心理尺度ファイル-人間と社会を測る-  
垣内出版 Pp.363-364.
- 川成 洋 2000 大学崩壊! 宝島社
- 小牧一裕・岩淵千明 1997 授業規範:反規範行為における意識構造 日本  
心理学会第61回大会発表論文集, 381.
- 神足裕司 1996 社会風俗用語の解説 自由国民社 (編) 現代用語の基礎  
知識1996 自由国民社 Pp.1006-1009.
- 神足裕司 1997 社会風俗用語の解説 自由国民社 (編) 現代用語の基礎  
知識1997 自由国民社 Pp.818-821.
- 神足裕司 1998 社会風俗用語の解説 自由国民社 (編) 現代用語の基礎  
知識1998 自由国民社 Pp.1145-1149.
- 水野邦夫 1998 a 授業規範の構造およびその違反に対する許容度について  
聖泉論叢, 6, 89-102.
- 水野邦夫 1998 b 大学生の受講態度に及ぼす諸特性の影響について 日本  
心理学会第62回大会発表論文集, 375.
- 水野邦夫 1999 大学生の受講態度に及ぼす諸特性の影響について (2)  
日本心理学会第63回大会発表論文集, 1025.
- 水野邦夫 2000 授業規範違反への許容度に影響する要因について 日本心  
理学会第64回大会発表論文集, 1102.
- 中岡慎一郎 1999 大学崩壊 現職教官が語るその実態と改革案 早稲田出  
版
- 岡部恒治・戸瀬信之・西村和雄 1999 分数ができない大学生 東洋経済新  
報社
- サックス P. 後藤将之 (訳) 2000 恐るべきお子さま大学生たち 草思社

(Sacks, P. 1996 *Generation X goes to college: An eye-opening account of teaching in post modern America*. Open Court.)

Symonds, P. M. 1939 *The psychology of parent-child relationships*. Appleton Century Crofts.

東京都生活文化局 1982 東京都青少年問題調査報告書 大都市高校生の性をめぐる意識と行動—その実態と生活環境・心理的特徴などとの関連—  
東京都生活文化局